

留学・研究計画書

氏 名 岩城 考信	留学機関名 チュラロンコーン大学社会調査研究所
留学先国名 タイ国	留学期間 西暦 2004 年 10 月 ~ 2006 年 10 月
研究テーマ (留学目的) タイ・バンコクにおける水の都の構成原理と近代の変容過程に関する研究	
研究テーマ (留学目的) の説明	
<p>本研究は、タイ・バンコクを対象として、水と密接に結びつく都市や建築の空間がどのような過程を経て形成され、19 世紀後半から始まる近代化の過程の中でいかにして変容してきたかを解き明かそうとするものである。</p> <p>タイ・バンコクは水の都としてよく知られており、チャオプラヤー川を中心に水路が縦横に巡り、都市を形成してきた。人々は、本来居住に適さない低湿地デルタという特異な自然環境のもと、排水・下水路としての水路網を整備して水害から都市を守り、舟運、生活用水、防御、信仰の対象などあらゆる面で水を積極的に利用しながら、水と共存する独特なまちづくりを行ってきた。そこでは、住居や店舗、市場や宗教施設などの公共施設に至るまで、その多くは水路に面し、環境に適応したバンコク独自の都市空間が生み出されてきたのである。こうした水の都としてのバンコクは、チャオプラヤー川沿いやその西岸のトンブリーに今もなお生き続けており、前近代の都市や建築の空間構造を理解するためにはこれら地域の調査・研究は欠かせない。</p> <p>一方、バンコクの中心地であるチャオプラヤー川東岸のプラナコンでは、近代以降、道路網の建設により水路が役割を失い、すっかり陸の都市へと変わったと考えられている。しかしながら、1896 年と 1932 年の地図を比較する限り、道路整備のために暗渠化や埋め立てが行われた水路はほとんどない。むしろこの時期に、建設された近代都市施設は水辺に建設されており、また水路の数も増えていることが見いだせる。これは陸の都市を目指した近代にあっても低湿地という環境に適応しながら都市開発を行うためには、水路が重要な意味を持っていたことを示す。またこの時期に開削された水路は、単に排水・下水路として重要だっただけでなく、敷地内部にも引き込まれ、水の庭園を形成し、新しい水の文化を生み出したのだ。</p> <p>このようにプラナコンとトンブリーというバンコクの二つの地域を対象として、さらに都市の近代化を水との関係性から論じた研究はほとんど見られない。自然環境と共存するかたちで都市開発がいかにして成し遂げられ、そこにどのような空間が生みだされてきたかを明らかにしようとする本研究の意義は大きい。さらに近年、渋滞緩和のために水上交通が見直されている。しかしながら、高速で走る水上バスは、引き波や騒音を作り出し、水辺に住む人々の暮らしに大きな被害を与えているという側面を忘れてはならない。このような開発を水の都の再評価として手放しで礼賛するのではなく、本研究のように都市の空間構造を解読した上で水辺の開発を計画することこそが、地域文化の見直しや歴史的な環境ストックの保存にも繋がるものと確信する。</p> <p>なお本研究は、文献史料と現地での実測・聞き取り調査の両面から行う。街路や水路、敷地割り、宗教施設、住居や店舗などの都市を物理的に構成する要素のみならず、降雨、洪水、潮汐といったバンコクの特異な自然背景や人々の階級、職業、民族、宗教といった社会的背景にも着目し、それらを有機的に結びつけながら歴史的に考察する点に本研究の大きな特徴がある。それゆえ、国立公文書館や王室財産管理局の文献史料のみならず、地域に埋もれた歴史を、碑刻や過去帳、聞き取り調査によって掘り起こすことも重要となる。</p>	

成果報告書

記入日 2006年 11月 27日

氏名 岩城考信	留学先国名 タイ	所属機関 チュラロンコーン大学社会調査研究所
---------	-------------	---------------------------

研究テーマ： タイ・バンコクにおける水の都の構成原理と近代の変容に関する研究

留学期間： 2004年 11月～ 2006年 10月

本研究は、タイ・バンコクを対象として水と密接に結び付く都市や建築の空間がどのような過程を経て形成され、19世紀後半から始まる近代化の過程の中でいかに変容してきたのかを解き明かそうとするものである。申請時は対象とする時代を「19世紀後半から」と曖昧に書いていたが、留学を通して都市や建築を物理的、空間的に記述した史料（古地図や都市計画図など）は、1890年代以降のものしか存在しないことと、現存する建築も古いものでも1890年代以降のものがほとんどあることから、扱う時代を1890年代から1940年代までとした。

1. 調査手法

留学中は主に以下の三つの調査を行った。

1) 古地図の収集と分析

古地図を収集し、年代の異なる地図を比較することで都市や建築の空間変容を物理的かつ視覚的に把握し、フィールドワークの対象の絞り込みを行った。また古地図は、個々の建築の建設年代の把握にも利用した。古地図の収集で報告者が利用した機関は、タイ国立公文書館、タイ国立図書館、国軍地図局、チュラロンコーン大学建築学部図書室である。

2) 現地調査（聞き取り及び測量調査）

古地図で都市の変容を探り、特に水辺空間を対象に水路、船着場、道路、敷地割り、建築の連関によって生み出される都市空間の類型化を行い、調査対象を絞りこんだ後、聞き取り及び実測調査を現地で行った。当初実測調査は、時期を集中させて行う予定であったが、大都市であるバンコクを対象とする本研究では、平日は家主が不在であることが多く、週末の土日にインタビューと測量調査を行った。測量調査は、居住者の許可を得た上で1890年代から1940年代に建設されたものを対象に30戸ほど行った。現在、CADソフトを利用して図面化を行っている。

3) 文献史料の収集と読解

文献史料の収集は、一次史料を中心にタイ国立公文書館、タイ国立国会図書館で行った。年代としては1890年代から1910年代を中心に土木省（局）、首都省、灌漑局の史料から河川行政及び法律、河川と道路整備の実態（土木技術や技術者）を主に収集した。ただし、現在まだ十分に読解できていないとは言えない。今後の課題である。

これら三つの作業は基本的にはそれぞれ時期を集中して行ったが、現地調査後に文献史料を探しに行ったり、文献史料を見つけた後に関係する地区や建築の現地調査を行ったりした。上記の三つの調査手法は単体で成立するものではなく、相互に結び付き、実証的な研究を進める上で重要であった。

以下では、筆者の行った調査をもとに報告者の研究の現在の到達点と今後の課題を報告したい。

2. 古地図から読み取るバンコクにおける水路の機能

まず1900年代印刷の地籍図¹（縮尺1:1000以下「地籍図」）を題材に、バンコクのラタナコーシン地区（城内）のバンランブーを中心に水路の多様な機能、及び都市空間と水路の関係性、近代における水辺空間の変容を報告したい。この「地籍図」には個々の建築形態及び建材（煉瓦造か木造かを判別可能）、また宮殿や政府施設、産業施設などの詳細な名称が記載されている。つまり「地籍図」はラーマ5世期（1868-1910）の都市空間を物理的に分析する上で最も重要な史料の一つと言える。ただし、「地籍図」これまでの先行研究ではほとんど利用されてこなかった。

¹Krom Phaenthi (1907-1911printing). Briwen Krung Thep. Krungthep, Hong Phim Krom Phaenthi(タイ国国立公文書館及び国立図書館、内務省土地局蔵)

1) 水路の機能

バンコクは海拔数メートルのデルタの低湿地に立地し、雨季の終わりには洪水が起こる洪水常襲地域であった。それゆえバンコクの都市空間は、水路の開削を通して河川もしくは運河に沿って拡大してきた。これら水路は人々の暮らしや都市開発に対して様々な機能を担っていた。すなわち、地域間を繋ぐ河川交通の充実、灌漑用水路または排水及び下水路としての機能、また生活用水及び飲料水の確保といった機能である。また水路開削はバンコクの都市開発においても一つの重要な土木的な機能を担っていたと考えられる。水路開削は、1) 洪水常襲地域である低湿地を開拓し、2) 残土を盛土して水路沿いに人工的な微高地を生み出すための一つの手段でもあった、と捉えることが出来る。このような盛土によって生み出された空間としては、現在もチャオプラヤー川西岸のトンブリーの果樹園に見られるロンスアンや浚渫の残土によって造られた堤防などが挙げられる。

1782年の遷都以来、チャオプラヤー川の東岸にはバンランプー・オンアーン運河の開削と城壁の建設を通して城壁都市ラタナコーシン地区が生みだされた。そして城内は王宮を抱き、王侯貴族の居住する「王都」として発展してきた。城内には幾つかの幹線水路が開削されたが、城内の水路の諸機能も上記と同様の説明ができると思われる。報告者が特に注目したことは城内周辺では寺院を囲む水路が多く開削されていたことである。これらは寺院への船でのアプローチを可能にすると共に、前述したように降雨時の排水路として機能し、また寺院の土地を洪水時に水没しない微高地へと変える盛土の産出にも繋がったと考えられる。加えて寺院周辺に巡らされていた水路には、聖域と俗域を別ける意味合いもあったと推測される。

2) 水路と都市空間の関係性

既往研究によれば、王族や王侯貴族の居住地は城内外の水路に沿って形成されていたことが知られる。一方、城内は遷都以来水路のみならず道路によっても都市が形作られてきた。ここで別の角度から、城内における水路と都市空間の関係性を直接水路に面さない「陸封」された宮殿や邸宅、寺院の立地から見てみたい。そもそも城内には城壁に沿って建設された道路沿いの「陸封」された土地にも多くの宮殿や邸宅、寺院が立地していたことが知られる。ここで注目したことは、ラタナコーシン区の城壁には63の城門が存在していたことである。これは日本や中国といった東アジア、またヨーロッパの城壁都市と比較すれば、その数の多さが際立つ。「地籍図」には現在取り壊された城壁と城門の位置が記載されているので、これを利用して城門の位置とその正面に立地する土地及び建物の当時の利用状況を比較すれば、城門の先には寺院や宮殿、邸宅が立地していることが分かる。つまり、城内の「陸封」された寺院や宮殿と城外のチャオプラヤー川や国豪（バンランプー・オンアーン運河）を繋ぐために多くの城門が建設されたと考えられる。換言すれば、城内の「陸封」された土地に立つ王侯貴族の居住地もまた水路との関係性を重視して計画されていたことが明らかとなった。

3) 水路沿いの土地利用の変化

19世紀後半からのバンコクの都市開発では、道路建設とそこに隣接するショップハウスに代表されるような「陸」の都市開発が主流となる。しかし水辺空間も社会や経済の近代化とは無縁であったはずはなく、水辺でも当然のことながら土地利用の変容に起因する建築の建替えなど起こったと考えるべきある。そこで次に城壁とバンランプー運河に挟まれた水辺空間の土地利用について着目した。既往研究によればラーマ4世期以前は、城外及び国豪沿いには、農地や湿地が広がっていた。その後ラーマ4世から5世期に城外の水辺空間、城壁と国豪に挟まれた土地もまた王侯貴族の居住する土地へと変化していった。一方「地籍図」を見るとバンランプー運河に沿って多くの製材所が立地していることが分かる。つまりこの「地籍図」と既往研究から高級住宅地から産業地へと土地利用が変化していることを読み取ることができるのである。このように劇的に土地利用が変化した事例を道路沿いでは、報告者は見つけることができなかった。

3. 水路と商業空間

バンコクの建築史に関する既往研究では、宮殿や寺院、邸宅といった王権を表徴する建築の研究はあるものの、「港市」として発展してきたバンコクを支持してきた河岸や河港施設に関する研究は充分になされているとは言いがたい。そこで報告者は、バンコク最大の商業地域であるサンペンの特に水辺空間に着目し、水路、道路、敷地割りや建築の相互の結びつきによって構成される水辺空間がいかなる背景のもとに形成され、都市の近代化の過程の中でいかに変容してきたのかを古地図と実測調査をもとに検討した。

1) 水辺空間の空間類型とその立地特性

サンペンの水辺空間を対象に、水路、船着場、道路、敷地割り、建築の連関によって生み出される都市空間を形態的に類型化すると、それらは「河港型」、「地先河岸型」「共有船着場」という三つのタイプに分類出来ることが明らかとなった。

(1) 「河港型」

「河港型」は、チャオプラヤー川といった大型河川沿いに立地し、敷地毎に独立した船着場もしくは棧橋を持ち、水路から垂直に陸路を引き込み、その両側に倉庫が並ぶという空間構成を持つ。1900年代の「地籍図」によれば、河港の立地する土地は、王侯貴族やタイ人に所有されていたことが明らかとなった。また「河港型」には20世紀以降、チャオプラヤー川沿いの水路を埋め立て、棧橋を設置し、広い道幅を持つ道路を建設し、そ

の両側に煉瓦造の棟割長屋を建設した「埋立河港型」が出現する。このタイプは政府により建設され、棟割長屋は華人へと貸し出された。

(2) 「地先河岸型」

「地先河岸型」は、チャオプラヤー川から内陸へと引き込まれた水路沿いに特徴的に見られる。このタイプは水路と平行に幅員3から4 μ mほどの路地が通り、水路側には、奥行き3 μ mに満たない木造の倉庫兼船着場（地先河岸）が並び、陸側には店屋が並び、その裏側には、地主の邸宅が立地するという空間構成を持つ。「地先河岸型」の現存する事例としては、サンペン西端のサパン・ハン周辺のヤー・チュン小路(Trok Ya Chun)沿いがある。

(3) 「共有船着場型」

「共有船着場型」は、チャオプラヤー川沿いに立地し、水路沿いに共有の船着場を持ち、そこから路地を引き込み、その両側に敷地が並ぶ空間構成をとる。現存するものとしては、サンペンの東端、タラート・ノーイにあるサンチャオ・ロング・クアック小路 (Trok Sanchao Rong Kueak) が挙げられる。この小路添いには、零細な商社や工場、商店が立地していたと考えられる。ここでは20世紀以降、商店が労働者の集合住宅地へと転用されたケースが散見される。

以下では、チャオプラヤー川といった大型河川沿いに立地する「河港型」について事例を挙げながら、その空間構成の特徴と近代における変容を建築形式に着目しながら報告する。

2 「河港型」の空間構成・ソソワート通りの事例

(1) 「ラ暦125年火災地図」から見る地主の階層分析

1906年に作製された「ラ暦125年4月4日の火災地区におけるタンボン・サンペンの地図」(以下「ラ暦125年火災地図」)を用いて、当時の地主の階層分析を行う。サンペン通り沿いやサンペン通りと河港とを繋ぐ小路沿いでは、間口が狭く奥に深い短冊状の敷地割りが並び、そこでは王侯貴族、タイ人、華人といった多様な階層の地主が混在して土地を所有していたことが読み取れる。一方、チャオプラヤー川沿いの河港や船渠沿いの規模の大きな土地では、華人の地主がほとんど見られない。これらの土地は、政府及び王侯貴族、タイ人に所有されている。つまり、多くの華人が居住したサンペンであっても、その物流と経済の中心である河港の地主は政府やタイ人のものであったのだ。ただし、この史料からは当時の河港の経営システム、つまり、地主と河港の経営者は同人であったのか否かを読み取ることは出来ない。

(2) 河港施設の近代化

チャオプラヤー川沿いの河港空間が大きく変容するのは、1906年から1910年代初頭にかけて、ソソワート通りが建設され、河港が立地した敷地が二つに分断されたことによる。新しく出現した道路沿いには、洋風の装飾を持つ店屋やショップハウスが建設された。しかし、この道路建設によって河港に依拠するサンペンの物流、経済システムが激変したわけではなく、むしろ舟運と陸運がより密接に結び付き、効果的な交通体系が生み出されたことにより、船渠が埋め立てられ、そこには政府所有の「埋立河港」が新たに建設された。また、河川沿いに立つ、河港施設にも変化が見られた。それまでは河川にのみ隣接していた土地が、道路による分断に伴い河川と道路という二つの交通路に面することになった結果、水路に対しては従来の河港施設としての倉庫と道路側にはショップハウスを配置し、倉庫とショップハウスが一体となった建築形式が生み出されたのである。つまり、ソソワート通りの建設は、土地利用のあり方に大きな変化を与え、その結果として河港施設に新たな建築形式を生み出したと言えよう。

以上のように、サンペンでは隣接する河川の規模、河岸の機能、敷地割り、建築が相互に結びつき、合理的な水辺空間が生み出されていたことが明らかであった。また、19世紀末以降、チャイナタウンの水辺空間では国家レベルの街区規模の都市改造や華人による個人レベルの敷地規模の開発が行われることが明らかとなった。また1900年代のサンペンでは政府、王侯貴族、タイ人、華人によって土地が所有されており、彼らの土地は混在していることが明らかとなった。しかしながら研究で対象とした水辺空間では、水辺に華人が土地を所有しているケースはほとんどなく、その多くは王侯貴族やタイ人によって所有されていることが明らかとなった。ただし、現地での聞き取り及び古地図に依拠する研究では、華人が地主から土地を借りてそこに店屋や倉庫を独自に建設していたのか、また土地の借り主が建物を投資目的で建設し華人の店子へと貸し出していたのか、地主が店屋を建設し賃貸物件として貸し出していたのかを解題することはまだ出来ていない。このテーマの解題は、サンペンの水辺空間のみならずバンコクの都市形成や社会経済システムとも係る重要なテーマである。今後の課題としたい。

4. 近代都市計画にみる水環境への適応手法

19世紀末から20世紀初頭にかけて、二つの新しい郊外住宅地がラタナコーシンの北部と南部に開発された。1897年以降、政府は、北部にドゥシットと呼ばれる王族のための郊外住宅地を計画、建設した。一方、王侯貴や高級商人は、南部のバーンラックに彼らの資本を投入して、郊外住宅地を開発した。これら郊外住宅地を計

画するにあたり、計画者は直線的な道路の建設、グリッド状の街区構成、街路樹の設置、上水道の完備といったドイツやイギリス、フランスなどの西洋諸国やシンガポールといった海峡植民地で行われていた近代都市計画の考え方を利用したのである。しかしながら、バンコクの郊外住宅地開発には、水路開削が必要不可欠なものであったことが明らかとなった。郊外住宅地の道路という新しいインフラストラクチャーの開発は、水路を並行に開削し、その残土を盛り上げることにより建設されたのである。それゆえ、バンコクの郊外住宅地における道路の建設は、水路開削に依存していたと言えよう。加えて、バンコクの郊外住宅地が開発された土地は、既存市街地に比べ、より水捌けの悪い低湿地であった。つまり、バンコクにおける新しい郊外住宅地の開発では、王都・ラタナコーシン地区のような既存市街地以上に日々の潮汐、雨季の洪水によって土地が用意に水没や湿地化してしまうという自然環境にいかんして適応するかが強く意識されていたのである。さらに、道路建設のために下水・排水路の残土が利用されただけでなく、これら水路は王族の空間と公共空間とを物理的にも、象徴的にも分ける境界の意味をも持っていたのである。さらに、王族の宮殿の敷地内には、巨大な池を持つ庭園が生みだし、親水性の高い水と緑に囲まれた自然豊かな居住空間が生み出された。この水の庭園は、チャオプラヤー川から直接、水路を引き込み、新鮮かつ衛生的な水が循環する潮汐庭園であった。このようにバンコクで行われた最も大規模な近代都市計画でさえ、環境的な必要性和伝統的な都市景観への考え方の両面において水路が必要不可欠なものであったといえよう。ラタナコーシンの機能不全の水路に比べて、ドゥシットにおける水路は都市景観の重要な要素として、また衛生的にも都市計画的にも必要不可欠なものとして近代都市空間に組み込まれたのである。

5. まとめと今後の課題

このようにバンコクの中で多様な地区を扱った理由は、そもそも水路は多様な機能を持ち、時代や場所によって求められる意味や機能に変化し、それに伴い水辺には多様な都市空間が生み出されていたことが古地図の分析と現地調査から明らかとなったからである。今後の課題は、場所性や建設年代、居住者の社会階層、土地改良が建築に物理的にどのような影響を与えたのかを考察することである。特に住宅の床高は、洪水や湿地対策としての土盛りの高さと密接な関係と密接に結び付いているように思う。1890年代から1940年代にかけて建設された建築の床高の多様性（2.5mを超えるものから1.5mほどのもの）が出現した背景を単に西洋化とか、近代化に伴うライフスタイルの変化として捉えずにバンコク独自の水環境への適応手法として捉え直すことができないか、と考えている。

6. 報告者の成果目録

出版物による業績

■岩城考信 (2005.10). 「バンコク・プラナコン 路地裏の宅地開発と住宅」. 『アジア遊学 特集アジアの都市住宅』. No. 80: 122-135.

■岩城考信 (2006.2). 「建築に見る歴史表象 -南タイの建築と空間文化-」. 『所報』. 526: 70-73.

口頭発表による業績

■岩城考信 (2005.1). 「水の都・バンコクにおける郊外住宅地開発 -1890 から 1930 年代におけるバーンラック地区とドゥシット地区を中心に-」. 京都大学東南アジア研究所バンコク連絡事務所における研究会 (於・京都大学東南アジア研究所バンコク連絡事務所) .

■岩城考信 (2005.11). 「タイにおける雨の恵み -雨水利用の現状と問題-」. 国際シンポジウム「雨と共生する水辺都市の再生」-多発する自然災害に備える住まい方を探る!- 第1部: 「雨と人・各国の暮らし今昔」, (於: 日本建築会館 301 会議室)

■Iwaki, Y. (2006.6). 'Potential for Study of Urban History Utilizing GIS based old maps: Case study of Central Bangkok, Using Old Maps during 1900s to 1910s'. Ancient Cultures, New Technologies. Maha Chakuri Sirindhorn Anthropology Centre, Bangkok Thailand.

■岩城考信 (2006.9). 「1900年代の地籍図から見たバンコクの都市空間と水路 -バンランブー地区の事例を中心に-」. ネットワーク型地域研究の成果と展望(21世紀 COE プログラム「世界を先導する総合的地域研究拠点の形成」). (於・京都大学東南アジア研究所バンコク連絡事務所) .

■岩城考信 (2006.11). 「バンコク・チャイナタウンにおける水辺空間の形成と変容」. 第2回「次世代の地域研究」研究会. (於: 京都大学東南アジア研究所) .

7. 留学を終えて

2年間の留学期間中、私は本当に恵まれた研究生生活を送ることができた。現地調査を通して、多くのタイ人と話をする機会を得たし、また多くの研究者と交流することができた。彼らからは、一人では知ることの出来ない多くの情報を得た。そしてバンコクの都市や建築の空間を解説するためには、その水環境と様々な要素とを有機的に結びつけて考察する必要があるのではないかという、留学前の仮説は留学を終えて確信へと変わった。この留学を通して得た知見を論文としてまとめ、社会に還元していくことが今後の課題である。留学という貴重な機会を与えてくださった松下国際財団に、心から感謝申し上げます。